

竹富町調査最終報告レジュメ
古琉球の竹富町の対外関係と海寇について

2002年7月26日

麻生伸一

1、はじめに

この調査では考古学発掘資料及び歴史学の先行研究を踏まえて、古琉球期の竹富町の対外関係を見出そうとするものである。しかし歴史学の中では、同時代史料の絶対的な不足から古琉球期の八重山の史実を解き明かすことは困難とされてきた。本研究においてもできるだけ史実に近づけるような論考を行うつもりであるが、多少無理をする場合もあるかもしれないし多数の問題も出すことだろう。しかし同時代資料であろう考古学資料をフルに活用して、当時の八重山の姿をすこしでもあらわしてみようと思う。

周知のとおり古琉球というと、12世紀より始まり17世紀のはじめである1609年に薩摩藩の侵入があるまでをいう。この間沖縄島ではグスク時代、三山時代を経て第一尚氏、第二尚氏時代へと移る時代である。また、この時代の大きな変化として挙げられることのひとつとしては明との公的な国交が開かれた時期であるということであろう。それによって琉球王国は大交易時代へと進んでいくのである。

八重山ではどうであろうか。1264年に久米島、慶良間、伊平屋の諸島が、1266年に大島諸島が中山に入貢したのに対し、宮古・八重山の入貢はそれより遅れること120余年の1390年である。¹当時の八重山について牧野清氏は1477年の朝鮮漂流民の見聞記と球陽の記述をもとに「酋長一島主いう政治的支配者はおらず、平和な純乎たる祭政の時代であって、神を祭る司祭者が神意を承けて、政治的問題もとりしきっていたものと思われる。入貢という政治的問題も、このようにして処理されたのであろう。」²と述べている。しかし、これでは宮古・八重山が同時に入貢したことの理由が余り考慮されていなく、宮古には与那覇勢頭豊見親がいたことが史実であれば、³余計に矛盾が表れてくるだろう。宮古の政治的指導者が何らかの影響を八重山に及ぼして互いに強調しあつてか、どちらかが服属して同時に入貢したという方が自然ではないだろうか。以上は仮定であるが、宮古・八重山間の交易関係、またそれ以外との対外関係を踏まえることが重要であろう。

この報告では八重山の交易関係を可能性として求めて、また当時繁栄した海寇との関わりを見出そうと思う。また、ここでは竹富町という範囲における対外関係を求めていきたいが、時には「八重山」という表現を使う。それは「球陽」などの正史の記述をもとにしたもので、竹富町というくくりができる場合には、「竹富町」という記述を用いるが、それが無理な場合には、「八重山」、「宮古・八重山」という表現を用いることとする。その時の

1 八重山島年来記

2 牧野清『新八重山歴史』

3 『球陽』

「八重山」の範囲は石垣市、竹富町、与那国町とし、「宮古・八重山」は「八重山」に平良市、下地町、城辺町、伊良部町、上野村を加えたものとする。

2. 宮古・八重山の古琉球時代

ア. 各島の首長

ここでは特に明初における八重山の首長関係について論じたい。宮古では目黒盛豊見親・与那覇世堂豊見親、後に仲宗根豊見親が、石垣にはオヤケアカハチと長田大翁主などが、西表島には慶来慶田城用緒が、そして波照間には明宇底獅子嘉殿がいた。ただし、同時代史料が存在していないので、『八重山島由来記』などを参照した。(図を添える予定です。)

イ. オヤケアカハチの乱

今まで多くの研究者がオヤケアカハチ・ホンカワラの乱についての研究を行い、多大な成果を残してきた。特に焦点となるべき事柄は、反乱が起こった原因であろう。『球陽』には「八重山は、洪武年間より以来、毎歳入貢して敢えて絶たず。奈んせん。大浜邑の遠弥計赤蜂保武川、心志驕傲にして、老を欺き幼を侮り、遂に心變わりを致して謀叛し、両三年間、貢を絶ちて朝せず。」とある。このような事実(?)の背景にはどのようなことがあったのだろうか。西里喜行先生は、先行研究は十分説得的ではないとして、十五世紀末の王府と宮古・八重山、宮古勢力と八重山の関係に十分な注意を払う必要があるとした上で何故反乱したのかという問題に対して「①首里王府は首都建設などに伴う財政上の必要から両先島を含む離島への貢納品加重の圧力を強めつつあったこと、②貢納品加重を整備する必要から祭祀儀礼の再編簡素化(信仰生活への干渉)を強要したことのほかに、③両先島の貢納品納入責任者の地位にあった仲宗根豊見親が貢納品加重の圧力を八重山へ転嫁したこと、④八重山のリーダーたちは一致団結して貢納品加重などの圧力をはね返すことができず、宮古の豊見親の離間策によって切り崩されつつあったことに注目しておきたい」としている。⁴しかし、大浜氏は中国商人らとの密貿易が拡大する状況で、八重山勢力が組する大和の密貿易者集団と琉球王国との利害の衝突ではないか、としている。その理由として、倭寇などの日本の交易集団の取り締まりの強化と、王府の貿易権の独占願望を挙げている。また、『球陽』の作成のときには薩摩への気兼ねや政治的な意図により、歴史事実の歪曲が行われたのではないかと指摘している。⁵どうであれ、大浜氏の論拠の根底には、八重山地方の大和との交易があり、それを裏付けるものとしての石積み遺構がある。

竹富町の中には石積み遺構は多々見うけられる。そのなかの鳩間島にはナーマヤーヤシ

⁴西里喜行、狩俣恵一『「西塘とその時代」論争—西里・狩俣往復書簡—』(『竹富町史だより』21号)2002)

⁵大浜永亘『八重山の考古学』(先島文化研究所、1999)第四章

キ（ナーマ屋屋敷）やブシンヤー（武士家）のように、武士が住んでいたという由来がある場所もある。⁶鳩間島のこの場所は八重山編年においては第三期に属しており、また外来陶磁器が発掘されていることから、古琉球期に交易者が根をおろしていたかもしれない。

3. 八重山の交易

ア. 歴史学による陶磁器の交易の考察

現在琉球列島において発掘の多大な成果を挙げているのは陶磁器についてであろう。その発掘量は、他府道県と比類がないほどのもので、高良倉吉氏がその著書で「陶磁器列島」と称している。⁷その琉球の陶磁貿易について国吉菜津子氏は先行研究をまとめ、氏の考察を加えて次のようにまとめている。⁸

- (1) 琉球は明代初期に、前代までの陶磁器需要を前提として自ら積極的に中国陶磁の獲得に乗り出した。
- (2) 当初は国内需要のためだけの陶磁輸入であったが、間もなくそれを海洋国家の利点を活かした中継貿易の主要商品として扱うことになった。
- (3) 陶磁貿易で扱われたのは主に青磁であり、それは幾つかのメリットから福建地方で購入された。
- (4) 琉球は東南アジア諸国の陶磁器需要に応え、中国の陶磁生産窯の仲介役を果たしていた。
- (5) 琉球の陶磁貿易は数々の原因によって一六世紀後半には幕を下ろし、代わって中国商人、ヨーロッパ商人、日本の九州商人などが結びついた大陶磁貿易へと発展することになった。

ここでは、琉球王国を主体として論考されているため先島についての考察が行われていない。私は、八重山との関係性を与えることが琉球王国全体を考えるときにも大切であると思う。なぜならば明代に入り中山をはじめ三山が中国に入貢をして朝貢貿易が始まったのだが、洪武16年の海禁＝朝貢体制のひとまずの完成によって起こるいわゆる密貿易者の台頭⁹という事実への考慮が必要だと思われるからだ。

実際に太宗実録永楽2年5月甲辰の条には「礼部尚書李至剛等奏す『琉球国山南王、遣使して方物を貢すに、就ち白金を齎して、処州に詣りて磁器を市わしむ。法として当に捕らえて問すべし』。上曰く『遠方の人、利を求むるを知るのみ。安んぞ禁令を知らんや。朝

⁶ 『ぐすく グスク分布調査報告書(Ⅲ)―八重山諸島―』(沖縄県教育委員会、1994)

⁷ 高良倉吉「続おきなわ歴史物語」(ひるぎ社、1986)

⁸ 国吉菜津子「琉球における陶磁貿易の一考察」『南島史学38号』(南島史学会、1991、P34)

⁹ 檀上寛「明初の海禁と朝貢―明朝専制支配の理解に寄せて―」『明清時代史の基本問題』(汲古書院、1997) P221～226

延、遠人に於いては当に之を懐くべし。此れ罪にするに足らず』。」¹⁰とあるように、当時大量に陶磁器を輸入していたのに足らず、私的な密貿易を朝貢貿易を行える山南王がしていたことは興味深い。

一回の朝貢で七万点に近い量を手に入れたのにそれでも不足するという事は、¹¹相当な国内需要があり、かつ支配体系を整えるのにも一役かっていたのであろうか。

とにかく洪武23年には八重山が入貢していたのならば、陶磁貿易の恩恵を先島が受けていてもおかしくはないし、なにより海禁＝朝貢体制の完成によって暗躍した密貿易者が使用しにくくなった那覇の港を捨てて八重山のある地点を根拠にしたという仮定も立てられる。

イ. 考古学による陶磁器の交易の考察

考古学の成果は、実際にその場所で発掘したモノをもとに考察を加えることであろう。それには、少なからずある程度のモノについての史実や実際を知るバックグラウンドが必要である。ここでは、実際に出土した陶磁器の予備的な知識にある。琉球における陶磁貿易の衰退は16世紀の頃でその理由の一つとして国内生産を行うようになったということや日本からの輸入がある。したがってそれ以前は、琉球に存在する陶磁器の殆どが中国産であったということは間違いない。そこでまず、三上次男氏の論文をもとに出土陶磁の年代と数量の関係及び分布の地域差の問題を、明代を中心に述べてみる。それによると沖縄諸島からは、唐代後期の長沙瓦渣坪窯磁、宋代、特に南宋時代には青磁、白磁、青白磁、黒釉磁、褐釉磁が、元代になると青磁、白磁、元染付が、明代には青磁、白磁、黒釉磁、褐釉磁などが出土している。量においては時代が進むほど多くなり、明代のそれはほかの時代とは比較できないほどの量が出土している。

最も古いものとしては西表島で、日本でも最古の中国陶磁が出土している。八重山でも、明代の出土品が元代などより多い。¹²これを踏まえて、また八重山編年の第三期を中心に、現在の考古学の調査を見てみると、竹富町の殆どの遺跡が中世のものであるのがわかる。¹³出土品も「外来陶磁器」という記述が多いことから、手段ははっきりしないが竹富町だけでも各島に外来の陶磁器が存在していたことがわかる。

このことから考えられることは、竹富町において結果的に明との関わりがそれ以前に比

¹⁰ 『『明実録』の琉球史料(一)』(沖縄県文化振興会公文書管理部史料編纂室、2001)の太宗実録を参照にした。

¹¹ 実録洪武七年乙卯の条に「刑部侍郎李浩及び通事梁子名に命じ琉球国に使して、其の王察度に…陶器一千事…を賜う。及お浩をして…陶器六万九千五百事…を以て其の国に就き馬を市わしむ。」とあり、市馬のためであるが、頒賜品と合わせて七万点近くの陶磁器が動いており、亀井明德氏は七万点が一回の船に積載される基準だとしている。(「琉球陶磁貿易の構造的な理解」『専修人文論集60号』、専修大学学会、1997、P44)

¹² 三上次男「沖縄出土の中世中国陶磁について」『琉大史学8号』(琉大史学会、1976)五章を参照

¹³ 『ぐすく グスク分布調査報告書(Ⅲ)一八重山諸島一』(沖縄県教育委員会、1994)

べて多くあったことがわかる。交易に限定して考えるとその方法として、まず交易の相手としては明、琉球、東南アジア、日本が考えられる。また、交易に行くのか、相手の商人が来るのかということも考えなくてはならない。このことについては次の項目で詳しく述べる。

4. 八重山の交易の相手の考察

先述したように交易の相手には地理的状況などから、明、琉球、東南アジア、日本が考えられるのだが、それぞれについて考えてみる。

ア、明

明は1368年に成立してから海禁政策、朝貢制度の確立を目指してきた。その段階で周辺諸国を新しい秩序の中に入れようとして朝貢を促した。琉球にも楊載を派遣して、それに対して琉球はすぐに使節を派遣して朝貢国のひとつとなった。

当時の明は国内が混乱していて特に沿岸地方では倭寇や海寇、内陸北方ではモンゴル人の侵入の為に、明の早急の課題は国内の安定であった。その中の一つの倭寇・海寇の動きは交易・略奪を目的とした中国沿岸の民間貿易の動きで彼等は、東アジア、東南アジアに多大な影響を及ぼしていると思われる。その段階で八重山にも民間交易者が根をおろしていたという可能性が考えられる。実際に考古学的な成果によると明陶磁器の発掘量が多大なことがあるので、明の交易者の存在はありえることだろう。

イ、琉球

前述したように宮古・八重山の中山への入貢は1390年である。しかし、この記述は宮古・八重山の人々が中山との交易をしていただけで、それを中山が勝手に入貢という捉えていたと考えられるので実際の入貢は、それより後実際には1500年のオヤケアカハチの乱以後であるとする。（これにはたくさんの論争があるが）理由として乱以後に西表に首里大屋子が設置され、石垣に蔵元が設置されたことでの実際の琉球王国の八重山支配が始まったと考えられるからである。

ウ、日本

日本との関係について明代以前については、ヤコウガイ、タカラガイなどの貝類や赤木、ビロウの交易があったという指摘がなされている。（山里純一『古代日本と南東の交流』吉川弘文館、1999、IV南島の貢進・交易物）明代についてヤコウガイの収穫はなされていたという考古学的成果があるが、（山木原論文）その量は明代以前に比べて多大に減少しており、その需要事態は中国でもあったことから、考古学的には交易は以前ほど多くは無かったということが一般である。ただ考慮すべきは、鳩間島・新城島で見られる武士に関する遺跡である。詳しくには、ブスヌヤシキ（武士の屋敷）、ブシンヤー・ブスヌヤー（武

士家)、ブスヌヤーヌイシガキ(武士の家の石垣)、ブスヌヤマ(武士の山)、大和墓などの遺跡であるが、これらの遺跡から鉄製品や鉄を精製するときに使用する道具が出土している。これが意味することは何であろうか。

佐久間重男氏は『明実録』洪武9年4月甲申条の「その国の俗、市易は紈綺を貴ばず。但磁器、鉄釜の物を貴ぶ。是により予および市馬を賜うに、多く磁器、鉄釜を用う。」とあることから、鉄釜を再生成する事で必要な鉄製品を手に入れていたと指摘している。¹⁴このことは本島のみであるが八重山でもまた、1479年の朝鮮人漂流記の中には「鉄冶有り。(中略)炊飯するに鉄鼎えお用いてす。足無く、釜に似たり。●(すなわ)ち琉球国より貿易するものなり。」(成宗実録、10年6月乙未条)とあり、鍛冶屋の存在があることがわかるうえに場所によっては琉球国からの貿易することも分かる。実際に西表島のなかでも上村遺跡、古見赤石崎遺跡、慶来慶田城遺跡などから鉄製品の存在を裏付ける窯跡、砥石、羽石などが出てきている。このことから、西表では多くの鉄の需要とそれに伴う外部からの供給があったのでは、と考えられる。その中で日本の存在は確実なことはわからないが、多少なりとの日本との交易があったのではという可能性は考えられるだろう。

5. 八重山との交易

では、八重山にはどういった交易者が来ていたのであろうか。交易で考えられるのは、八重山間の交易、対明交易、対日本交易、対琉球交易がある。この交易の場合、八重山に来て交易を行ったということが多いに考えられるので、それぞれの交易者が八重山に来ていたことは間違いないであろう。前述したように陶磁器の発掘でそのことが分かる。

交易で考えなくてはならないことは、八重山からの物の移動である。八重山からのモノの移動はどんなものが考えられるだろうか。『大明会典』によると琉球王国からの進貢物には、馬匹・螺殻(ヤコウガイ)・海巴(タカラガイ)・生熟夏布・牛皮・硫黄・磨刀石などが挙げられている。¹⁵螺殻や海巴などは、沖縄本島での交易も考えられが、密貿易が発達し始めた時期にはあえて本島に行かなくても、八重山での交易が行われていたのかもしれない。¹⁶また、大浜永亘氏は一四七七年の朝鮮人の漂流記から、八重山では生熟夏布が織られていただろうと指摘している。¹⁷

6. 倭寇と海寇

「倭寇」という文字は中国や朝鮮の文献に登場するのみで、日本の文献にはみられない。本来は日本人が、寇賊あるいはその行動のはずが、時と場所の違いによってさまざまに用

¹⁴ 佐久間重男「明代の琉球と中国の関係—交易路を中心として—」(明代史研究会、『明代史研究』3号、1975)

¹⁵ 佐久間重男、前掲書

¹⁶ 大浜永亘『八重山の考古学』(先島文化研究所、1999)第四章

¹⁷ 大浜永亘、前掲書

いられ、・・・一般に「倭寇」とよばれているのは一四～五世紀の倭寇と一六世紀の倭寇であり、・・・倭寇は東アジアの沿岸諸地域を舞台とした海民集団の一台運動であるが、構成員は日本人だけでなく、朝鮮人・中国人・ヨーロッパ人を含んでいる。・・・倭寇の活動は東アジア諸国の国内事情を母体とし、国際関係の歪を引き金として発生し、大きな影響、大きな爪あとを中国大陸・朝鮮半島・日本列島・琉球列島・台湾・フィリピン・南方諸地域の諸国人民に残し、これらの地域の歴史を変革しながら消滅していった。

二つの時期の倭寇の全貌を知るためには、まずこの時代の東アジアの国際環境がどのようなものであったかを正確に把握しておく必要がある。中国大陸では漢民族の宋が蒙古民俗によって倒されて元王朝がおこり、それがさらに明によって漢民族の支配が回復されている。朝鮮半島では四〇〇年以上つづいた高麗が倒れて李氏の朝鮮がかわり、琉球列島では新興の中山王朝が沖縄本島の統一をなしとげて海外発展に乗りだしている。日本でも鎌倉時代から南北朝時代を経て室町時代に移り、武家の政権が日本全国を支配する体制がようやく固まりつつあった。アジアの国々はそれぞれに大きな変革を経験したといえよう。倭寇はこうした東アジアの激動の時代に発生して国際社会の動向を大きく左右したのである。

（田中健夫「倭寇—海の歴史—」教育社 1981）を編集。

また、八重山で倭寇を考察するときには「海寇」という表現を用いることとする。海寇は寇賊の中身的には倭寇と同じであるが、朝鮮半島や中国に対するものではないのでこの表現を用いることとする。わたしは倭寇にしる海寇にしる略奪行為のみが中心では無くてもむしろ交易を中心とした交易集団だと思っているので、八重山でも、交易者と混同して考える。但し、倭寇や海寇を相手にした交易では、防御的な設備も必要だと考えているのである程度集中した村落とその村落を守る守備的な遺構が必要だと考えている。また、海賊との区別のニュアンス的な面で必要であると考え。

また、今後調査を踏まえて海寇と八重山のことについての考察を行う。